▲リフトを使って、車いすからベッドに移動する様子

求められる介護人材 新たな取り組み

「下関市ノーリフト宣言」の実現に向けて

高齢者の増加に伴い、介護を必要とする人が増える中、介護職員の不足が心配されています。今月の特集は、介護人材の確保に向けた取り組みを紹介します。

問介護保険課（☎231-1162）

高齢者の増加

市の65歳以上の高齢者人口は令和元年9月末時点で9万1642人、高齢化率35・05％となり、3人のうち1人以上が高齢者という状況です。そして、増加する要介護（要支援）認定者などを支えるため、介護の担い手は今後ますます必要となります。

不足する介護職員

厚生労働省によると団塊の世代が75歳以上となる令和7年には、山口県内で約3700人の介護職員が不足すると予測されています。このため、介護職員の処遇改善が行われるとともに、介護ロボットの導入や介護人材のキャリアアップ、定着促進に向けた支援などさまざまな取り組みが全国的に進められています。

介護職員が不足すると、必要なサービスを受けられなくなる可能性があります。また、家族の介護負担が増えることで仕事と介護の両立が難しくなるなど、介護職員の不足は、これからの私たちの暮らしに大きく影響してきます。

市の取り組み

介護人材の確保・定着、職場改善を目的に、介護職員の業務負担の軽減、介護事業所のイメージアップを図るため、市では「下関ノーリフト宣言」の実現に努めています。ノーリフト（ノーリフティングケア）とは、人が人を持ち上げない、抱え上げない、引きずらない介護のことです。利用者の自立を考えた適切な福祉機器の利用と、体の間違った使い方をなくした正しい介護技術の実践による、利用者と介護職員の双方に優しいケアを意味します。

持ち上げない 抱え上げない 引きずらない

市では、昨年度、ノーリフティングケアのモデル事業所を選定し、介護用リフト等介護福祉機器導入補助やノーリフティングケアを実施するための職員研修、体制づくりの支援を行っています。今後は、このモデル事業で得たノウハウを他の介護事業所へ広げていき、市全体でノーリフト宣言ができるような環境づくりを進めていきます。

アイユウの苑
髙下 康司さん

モデル事業所の声

ノーリフティングケア実施モデル事業所である「アイユウの苑しおはま」の髙下主任生活相談員に話を伺いました。以前から、職員が長く働くことができるように、職員の体の負担を減らすための対策が必要だと感じていたという髙下さん。「これまでは、人の力で利用者を抱え上げることも多かったので、腰痛や首痛が職業病のようになっていました」。中には介護の仕事を続けたいけれど、体を痛めて辞める人もいたそうです。

「人と人が直接触れ合うケアが今までは主流だったので、福祉機器を主に使うノーリフティングケアの開始当初は、職員や利用者に戸惑いもありました」。取り組みはまだ始まったばかりですが、「二人がかりで行っていた介助が一人でできるようになった」「重い物を持ち上げることが少なくなり、体への負担が減った」と職員の評判も上々です。利用者とのコミュニケーションの時間が増えたり、その日の状態を観察できるようになったりと、ケアの質が向上し、利用者にも徐々に笑顔が増えてきたそうです。

「ノーリフティングケアの先進地である高知県の施設では、『利用者の擦り傷や床ずれ、筋肉がこわばって動きが悪くなる拘縮（こうしゅく）の予防につながった』との事例もあり、これからの効果に期待しています」と笑顔で話します。

人材確保の面では、「腰を痛めて一度介護の仕事を辞めた方が、ノーリフティングケアに取り組んでいる事業所ならまた働けると、こちらの事業所に就職したり、就職活動中の学生が見学に来ることが増えたりしています」と効果を実感していました。

あなたも笑顔の介護職に

市のホームページでは、介護人材確保のため、介護事業所向けや求職者向けの情報提供を行っています。利用者が笑顔で生き生きと暮らせるように働く介護職は、とても魅力的な仕事の一つです。あなたも笑顔あふれる介護の仕事をしてみませんか。

▶スライディングボードという福祉用具を使ってベッドから車いすに移動する様子

▲スタンディングリフトという福祉用具を使って、車いすから立ち上がる様子

▼職員も利用者もみんなが笑顔